名古屋城の主な城門

名古屋城では、奥の門を一之門、表の門を二之門とよんでいます。名古屋城の一之門は太平洋戦争の被害を受けすべて焼失しました。現在、本丸表二之門、旧二之丸東二之門、二之丸大手二之門だけが残っています。なお、旧二之丸東二之門は本丸東門の二之門跡に移築されて現存しています。正門は1911年（明治44）に旧江戸城の蓮池門を移築した門で、再建された建物です。

また、藩主の脱出のために秘密につくられていた「埋門」という門もありました。

今でも、二之丸の西側に石垣が残されています。他にも、普段は錠がかかっていて特別なとき以外は開けない「不明門」とよばれる門が本丸の北側に再建されています。この不明門は、天守と多門櫓をつなぐ高い塀の下につくられています。その塀は、軒下に槍の穂先を並べた剣塀になっています。剣塀は、天守と小天守を結ぶ橋台の堀側の塀にも見られます。

不明門と剣塀（再建）

本丸表二之門〈重要文化財〉

二之丸大手二之門〈重要文化財〉

本丸東二之門跡（旧二之丸東二之門）〈重要文化財〉

本丸表一之門（焼失）

本丸東一之門（焼失）

正門（再建）

名古屋城総合事務所

名古屋城 子ども博士になろう

学習シート「櫓・城門」編

― 櫓や城門はどのような工夫がされているのでしょう ―

名古屋城の櫓や門を探してみましょう

名古屋城には、下の図のように多くの櫓や城門がありました。その中で、本丸の「東南隅櫓」「西南隅櫓」御深井丸の「西北隅櫓」は、今も建てられた時の姿で残っています。また、城門も「本丸表二之門」「旧二之丸東二之門」「二之丸大手二之門」が残っています。

天守級の大きな隅櫓

名古屋城の隅櫓は、とても大きく、本丸の三つの隅櫓（西南、東南、東北）は、2重3階になっていて、1階の長辺が7間（名古屋城の1間は約2m）、短辺が6間もあります。さらに御深井丸の西北隅櫓は、3重の櫓で長辺が8間、短辺が7間の一段と大きな櫓です。清須城の小天守の部材を用いた建物で、清須櫓ともよばれています。他の城の天守と比べると、宇和島城が6間四方、弘前城は長辺が6間、短辺が5間、丸亀城の天守はさらに小さくなります。名古屋城は、他の城の天守を越える大きな櫓を隅櫓として並べられていたのです。

本丸や御深井丸の他にも、二之丸や西之丸にも隅櫓がありました。二之丸の太鼓櫓や西之丸の月見櫓等を合わせると全部で11の隅櫓があり、敵を監視したり、攻撃したりできるようになっていました。また、隅櫓の中には、戦いに備えて食糧や武器が保管されていました。

しかし、隅櫓の数は、広島城は二重櫓が35、平櫓が30もあり、尾張藩の家老の城だった犬山城でも13もありました。それでも名古屋城には多門櫓という総延長630間（約1,240m）にも及ぶ長大な櫓がありました。

西南隅櫓〈重要文化財〉

東南隅櫓〈重要文化財〉

東北隅櫓（焼失）

西北隅櫓（清須櫓）〈重要文化財〉

本丸を囲む多門櫓

名古屋城の本丸は、三つの隅櫓を多門櫓でつないで囲み、天守と合わせて厳重に守られていました。多門櫓は、敵を防ぐ城壁になるとともに、櫓同士をつなぐ廊下の役割や倉庫などの役割もありました。

多門櫓は本丸の他に、西之丸の南面や二之丸の東にもあり、他の城よりも隅櫓の数が少なくても、城全体を隅櫓と多門櫓でしっかりと守っていました。

現在は、1891年（明治24）に起きた濃尾大地震の被害を受けてすべて取り壊され、見ることはできません。

本丸表門付近の多門櫓（明治初期）

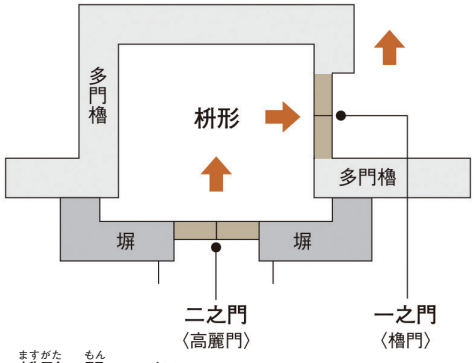
敵を防ぐ枡形

名古屋城の主要な門は、右の図のように、一之門・二之門を多門櫓でつないで、四角形の空間を備えたつくりになっていました。このつくりを枡形といいます。

表の二之門は、高麗門といって屋根を小さくして場内から監視しやすくなっていました。一方、奥の一之門は、櫓門といって、門の上に櫓が設けられていました。枡形に入ると櫓で囲まれる形になっています。

敵が二之門を突き破って入ってきても、まっすぐには進めず、曲がっても頑丈な一之門に阻まれます。そして、枡形に入った敵は、目の前の多門櫓や櫓門（一之門）から鉄砲や弓矢などで攻められます。また、門の扉は、表面全体に鉄の板が張られており、弓矢や鉄砲から守り、火にもしっかり備えられていました。

この一之門と二之門の二重の防御を施した枡形は、本丸の南と東に2か所、二之丸の東と西に2か所、西之丸に1か所ありました。さらに、その外側の三之丸にあった本町門、東門（東大手門）、巾下門、御園門、清水門も枡形になっていて守りを固めていました。



枡形の門のつくり